練りつくした熟達の表現
田崎悦子 ピアノリサイタル

菅野泰彦

田崎の幅広いレパートリーから名曲を集めたシリーズ、その第5回はバルトーク、ラフマニノフ、ドビュッシーのプログラム。まず、バルトークの『子供のために』より2曲と組曲『戸外にて』、凛とした表情や迫力ある打鍵など、素朴な旋律の魅力を引き出すストレートな表現、中でも、『戸外にて』より2曲『狩』では緊迫感があり、『夜の音楽』は夜の空気感と歌を表情豊かに奏でた。

続いて、ラフマニノフの2作品、まず、『前奏曲集』作品32より2曲、とりわけ、第12番では輝きを放ったり、壊れそうなほどの張りつめた表情、続く、『楽興の時』作品16の2曲、その第3番は重々しい和音を刻みつけ、悲しげな表情を浮かびあがらせ、第4番は熱情的に駆けめぐる劇的表現であった。

後半のドビュッシーの『前奏曲集第1集』は隅々まで配慮があり、生彩ある表現、『帆』や『亜麻色の髪の乙女』での実に柔らかな表情、『音と香りは夕べの……』は刻々と変わりゆく情景を想起させ、『雪の上の足あと』では駆使された弱音で悲しげな雰囲気を醸し出した。『西風の見たもの』はまるで生き物のように吹きすさぶ風、『沈める寺』でのカテドラルの壮大さを想像させる迫力ある和音の強奏は圧巻、茫漠からの音の立ちあがり方や、響きの波に沈みゆく結末も印象的だった。また、『パックの踊り』では軽い音でユーモラスに、『ミンストレルズ』は小気味よく、粋な演奏だった。（11月21日　東京文化会館小ホール）